



猿

蓑

云



猿蓑

信濃傳九撰釋

飯詰の集はくらり古今みわたり
愚考韓文曰人不通古今馬牛而如襟裾
をいとく百人一首を並ぶるもその見振
あり巻改を食するは殊り天智帝を
格別の法ありよし形り巻軸を廢帝を
あら住の山製るなり二名女帝ありて夜
あり宴ふ衣食住の三つを人とて上
する事大切のりものち書こころこれ
さて信陽合體一衣食住の三つ傳りぬ

三つ

ハ意の歌るり殊み人丸を和歌の巻みりて
人居の大事人情の實次よる花を月
雪の巻終是又我邦の大事るり殊み和
歌の二巻と書えり赤人あり於あま
沃もあり一巻と書えり赤人あり於あま
よ及よ赤を忘る事こ飯詰の集はくら
むとあり一巻此境第一味す巻一巻
その古今ありりて伝達る書ありて古
今みわたりを解しりくくむあやいふ
一をりて今を解すくくいふをりて
古一を解す一りりて又歌号を一
部の巻標を並ハを又むて大切あり七
部の五巻の法ありりてあり

此巻のれりて起一き時ありりや

一書に挙白集大如好書をまゝ大に
ついで長秋の巻よりの思ひ一子おし
はるるしるはらちとやみまはるる
おのろむ心謙ふ月節もたもておこす
きつめらるるや

不変れををさし心
愚考いり心流りすも正徳の根をこ
くはして正徳あり治徳の全るる心
要るる心とあり

五徳をいひ及ん心をとらふ
きこらるるや

一書に兵法一將の五徳あり所謂叢剛法量
度えりあり 一書に徳之曰徳徳よる連
の和ふ五つありありあり一子あり

やう二

信徳をいひ及ん心をとらふ
をいひ及ん心をとらふ
の浦る心よ心をよせ徳あり五集
古事来歴文ありあり一白あり
あり徳ありありありありあり
是五つの徳ありあり 愚考五徳をいひ
よ及ん心をとらふ 書ありあり
やうの徳ありありありあり
えか勝るありありありあり
一信徳をいひ及ん心をとらふ
ありありありありありあり
自漢の集ありありありあり

福して是より来るより比興有り五徳を
温良恭儉讓より以て是を有り来子曰五者
夫子の盛徳光輝接於人者也此五つ
の美徳を以て以て以て以て以て以て以て
五徳を以て以て以て以て以て以て以て
以て以て以て以て以て以て以て以て

彼西上人の

愚考釈氏要覽曰有過能自改曰上人
又事文類聚曰行善抱心曰上人云々
嘗て人を行つて以て以て以て以て以て

竹葉の笛を吹やうと云ふは竹の

風谷曰撰集抄曰西行上人同右の言人別集
花月の友よと云ふと廣き竹葉の笛を
阿弥はねて以て以て以て以て以て以て

似情まよふも色も心もす毎て心も情も
さうりきし舞をたのまふ結象の舞の如
く美も人をも心も有りてあそびハ舞ハ免
あそびくあそびきり舞は只その出づり舞斗
を忘るれば吹換へし笛れぬくも有り
さうりも此の舞も不審ふ是もて花洛も出
有りし時を以て一をもおせし徳大寺一
年あり此の舞を以て有りし一も此の魂の術
於月阿そく有りて多きを以て燒ぬ之略文
五徳の五の舞アウウ五コ

愚考其のさうく五を以て文章れ魂と
副腸の思ひをさげん此意も
孔子家語曰猿も月も一て生る性
音を司る是もて忘りし

いふ云猿子の集の序 昔子々をとりて
字のつて翁の稿あり 比又の書せるか介の
人し物と見えぬや 愚考の志をめぐ
翁の自筆と彼小向雲竹を学ひま
てを学ばさうしうひあり

初志ら小猿も小叢をふしし
古注よ曰定家卿 篠とめて青らばお井の
ひふいふ不しの不し 翁とる此歌の
上人推因士歌鳥帽子とりよりのを
て小弓を射るあり志のわを町家の男
をををまねひて小弓張をまてよ井の
るり翁ををををを猿人志似といふ
るり翁は小叢をふしし 宇を人にと
らまらるる

阿婆はつと阿婆るる夜の静の
一書よ小叢の白を此集の父よりして
白をぬるり次ししの白を産出するり
阿婆はつと心とぬしり静の静を姑
蘇城糸のよやと井とる三井の静と
きつこるる

阿婆はつと阿婆るる夜の静の
一書よいそを湖氷よの魚よりして一名
知と夫古人の云湖多ふりきりてお
愚考の金葉集友人ひえ山おるし志の
まて志るるしおひりよ濃田れ長橋おの歌を
流歌よりしてけいよくと初いよ
阿婆とをの是余の稿よりこるるの禮

廣澤やひたりとるく 活左序

成美曰詩經名物 解云、に戸とニクヒ
一君又マタラウと呼ぶのちり此又誇るり但
眼上淡白條ありを思とす

亦人ふぬりきてまゝ一とらまは

は白の説よりしりて元ふをうら 五芳
日出しぬこの建てまゝつるり 亦人を降
らふとするゆふ 津田一とらむといふを
み人る降るぬといふゆふ 亦人を降る
志らまはるをといふゆふ

るはり一やまらるの隨の一志ま

一書ふ伊賀の境ふ入とあまはまらう
きりの昔の糸は初をといふゆふ
一るりて竹田の里やり一これ

ヤリ五

一書ふ山城の木藪の里ふるるあまはまらう
そゆく君を替へんは歌をといふゆふ

初書ふ何とみよりそ 船の中

一書ふ能狂言うは不猿の歌行ふみ
中もまを何とれよりそ 答をまをまのうら
あらう

る川雲ふゆくや北斗の星のあ

成美曰朗詠集 劉元寂 北斗星前横

旅馬南樓月下擣寒衣 敬齋曰糸棧

活法ふ曰南極老人朝北斗又前五初志

ふ曰北斗人君之象也と又論徳ふ曰

若政以德譬也 北辰居其所而衆星

共之

一りあまらうくものまはる夜ふ

芝山曰五雜俎曰百草不畏霜雪而畏霜蓋雪生於云陽信也霜生於露陰信也

禊の松の落葉や神無月

愚考神無月之俗習あり新撰万葉小十月と書してカニナツキ西京雜記曰十月於卦為坤恐人疑其無陽故特謂之陽月所以見陽氣已萌也又本朝諸神出雲の大社よ集るゆへに神送り神送り神送りといふ

百古のあり世中の松よ十月

大節曰夫木集夜等左右大令野の松る方枝の萩も忘りの事して阿の事よ林そらまはゆ〜

淡柳をそらめて通り十夜もの形

愚考十夜を傳つて云伊勢守貞國といふもの其言をう〜り〜を感〜と如堂よりして始て新小津古宗孔を式りて十月六日より十五日までをいふ又俗よ十五日を急死丸めといふ

葉の花や不ありんるきと美聖女

成美曰傳灯録曰美照常制を行瀧羅

賣以供朝夕麗居士將入滅使美照遽報

曰日蝕居士出戸觀次美照登父座合掌座

亡愚考麗居士治録曰居士將入滅謂

美照曰視日早晚及午以報美照遽報已

中矣而有蝕也居士出戸觀次美照即

登父座合掌坐亡居士笑曰我女鋒捷

之て葉の花少くもをら山々を多やと
るり家より多くと多りの別言なるをを
る

高のそや牡丹の花の 志 裸

愚考内棧法信よ牡丹の詩款色却
因之露條英萃不畏雪霜欺

晦月より過ゆくうん亥子小

愚考雜五行書曰十月亥日食餅令人無病
又亥八十二月小子をる寸月のる多六女多
く福よと云く又大成経よ曰亥月増亥天
照太神幸魂大祚復後智恵多初天地
復鏡已降初地復以五色解并五色
幣及月辛酒五味菓等 誠精素之國
災皆消國後悉良と云く類聚國史曰

五
八

開化帝十月但列より初て餅をを款す
増の亥より進ハ十一月よりふる多あり焼
の餅とりよを熱向よして晦月より過
くと多焼の字よ力あり

祚 延 水 口 志 の 言 の 終

愚考杜荀鶴の白ふ延路於音夜
過山といひふるをりては山ありての
吟ありる必定るり禁秘抄曰件於大
有奥物也或六角或八角云々 一書よ水
口粮源寺の僧雲月報日祚延よ遠坂の
園と出るといひるを乞り非り存人よゆる
照中よりありありのる 赤板

一書よ此の雲月報日と神書あり
産夜新よ雲月報日如盤の祚一供術

梅の樹形は山より一色を善梅を角のと有
赤梅も七梅の一種あり又阿うう梅とも
り一書よ神供よすて梅を梅つる
り神居の古例あり梅を太神宮(梅の
梅忌戸五七具等ありあり三角梅といふ
玉書よ形して書交る善梅杖を善色
梅を角のり一社の習ふあり 又連枝
匠技集よ神供八平色よ盛とあり梅八
枝よ盛ありあり又三角梅といふ有天満宮
よて梅をとりのあり入浮ハ吉あり沈る
凶ありあり梅とを交のわら葉をりて
愚考あり梅といふを我傳よる七梅よ
あつて七梅の傳六梅の傳合て十三梅
ありはるよ付て不辨るよハ畧す又

土具島も土貢島あり二説有二見の東流
良島よりと云々て梅の浮沈の事
内大臣家良公神傳也并此の梅の事
志の并同よはるもめり袖の事是を
の注釈皆あつて梅の事斗を解て分
れをを解き天満宮太神宮の解此
白ふる不利也 成美曰増山并小菟月
形白小豆飯を角の所有を赤梅といふ
愚考も膳ありあり并よ魚肉あり雲邊
て葉も有り一色赤豆飯よ汁魚の物斗
といふるよ必定あり又同書よ契沖云
りハとる形して葉をりよ以葉をよも
りよとる赤飯をりハありよ赤
子をよむて赤梅といふよ也云々

水無月の水を種よや仙苑
 常言曰六月土用申水仙の根を洗ひ
 して梅の樹を花格別よとや
 と云く一説よ土用申よく日ふりて
 梅をよしとすといふ
 尾形の心よりとすは海氣の如
 五味堂曰海氣の口をさくといふ
 を天細女命其口をさくといふ
 愚考尾形の心よりとすは梅の如く
 多しぬ何家も海の氣と云くは小氣
 を字眼ふして一るととる
 なることよ多賀の考はのまら
 愚考多賀の考は舊事紀曰終列多賀の
 出現あり亦伊特諾尊近に
 新八因体

きの十

うして月少高とやなる申仙苑の通り
 増したる石の考を立
 住はるぬ旅の心や益火 糖
 紫叟曰夫木集正二位季純うらまひの
 うりてしてありと云やうとすははきう
 きりのもろありなり火燧よすみつぬ
 の五文字ちりちりをみる
 門前の小家もありと云ふ
 愚考易曰白雷在地中復先王以至日閉
 関商旅不行后不省方云と此日身を安
 一骸を静ふ寸又百友万事を強て
 改をすは是を五経通義白虎通本の
 畧文あり又年中行事よ云冬至を
 一陽來復して陽氣秘して至ると云

あるまじきハ身を勤まらんて微陽を養ふ
一又奴婢を養ふ事する事又追思
録曰冬至祭始祖冬至陽之始也始祖
厥初生民之祖也冬至を重んず大切
の日なり冬至ハ唐古よりして元日よりきく
禊祓といひつりこれハ日本の事なり又
家次才
入曰冬至の暮を重んず帝祚萬年二
年十一月己丑天皇大宴殿より出御あり
て冬至の賀辞を受とりし事又
冬至を禊祓の事あり桓武天皇延暦三年
十一月朔日始て禊祓ありし事あり
尤は年田
担を免さる事あり
又漢和天皇貞觀二年十月を小なるを

きり十一

大入ありし事十一月朔日より冬至を操出し
て禊祓ありし事あり彼赤松の白の詞書に
粟月朔旦とあり冬至ハ冬至ふありし事あり
ありし事あり書ありし事あり
矣田此形や浦の事ありし事ありし事あり
一書ハ矣田の形ありし事ありし事ありし事あり
成美曰余昔ハ海を過に伊弉諾神遊水の
傍にありし一里ありし事ありし事ありし事あり
此本戸や淡の事ありし事ありし事ありし事あり
去夏抄より曰冬至の月平賀の月並形ハ
より先師冬至の月より冬至ありし事ありし事あり
柴戸とよめし事ありし事ありし事ありし事あり

の久しふ葉の戸より何れは本産るもの
ふ秀逸るる一白も大切有り後合出板
ふおよみよと改一きよし有り 灌物曰
平家物語よ福系の初より徳丸も左大
将実定卿曰初の月見えむとしてよのま
て熱門をまきくこせとらるまは月より
奪もして誰そや遠せの露おそらふ人
るまきこふとせむまは是を福系より天将
屋のほのあつしとす左の熱門を論
のこまきとせむまはを東の小門より入ら
るまきとせむまは 愚考秀逸るる一白
大切有りといふまきこらるるあふらるる
初合せつりよや 高懸の詩よ 重門深
禁後月漏 躑山宮樹秋の付るまき
つり 十三

静さうを数珠もあつる細代也
愚考資乃付物記よ曰珠数の負一百
八者表二百八煩惱磨轉之別成二百八
煩惱尋常挽也又手黎曼陀羅呪
經曰梵徳もつ鉢塞莫と云又經略
云徳子後千倍蓮子後万倍水精後
子億倍もつ挽子後無量也又大論曰六
根各具六根六く三十六根也是配過去
現在未來三世合百八煩惱也
膝突よりこすりあつる
成美曰膝着る小すき
るり又神る名目数乘抄よ云軼る八
角の蓮よ縁をとるるの云く
雲ららや穂登の芒の荊残し

一書よ小村山系を七月廿七日芒を
見て以後をを遠りさうかよと徳金の
非りよとよい入歌よと裏とゆり山田の時
のむら芒刈人歌よと跡り此かのをさ
よとのまよと 成美曰撰集抄小曰淺弓の
多げよとを標の丹心おとくまのあるあり
さる信濃路の不也のすきよと雪らりて
よまふまを色のむらまのむらけ 公石曰
信濃津村山中の住りよとる芒よとてらみと
のを遠りそのか人の屋をよとあのかと
る皆芒の穂よとて遠りよと信宿を信濃
の一の宮健津名方村下の社よと照
娘よとて信宿よと在の村よとりよ
るり信宿 寅年 申年よとて 七年ぬしこ

四の十三

関東の人此年よ婚礼を結ぶら寅ハ子
里初て子望ゆるの美申を文字のひき
よとてとてとりよ信宿るり様との奇
奇信あまよと略す

赤字紙よ曰此白師の曰心の味をいひと
むと数日腸を忘らりとるりの支考曰空
也と空鞋を枯木を岩の親あるのら
空鞋よとを申の美吟をよせ空也よ
き夜の終りをむすよ申の二字を更
りよして瘦の一字を互思の格を学す一
一書よと申を歌りて芒よを念を
あふりよと鞋と空也と趣向よ更よその
物を終りよと也よを申よ苦修

于鞋を噴 履らさるるまじハ家小祀いて
瘦の一字をゆりてり是を白仇をむと
すりよきと結るるえく二つれもの
字をゆ更よ百練して一ッのびく字を
ゆ瘦の一字を祇しゆるるを心の味と云
りゆり中略 瘦の一字 双関 鞋と空也是
双関ありて互思よりゆりて考う説得る
愚考系 噴よも切 履らさるるまじハ
次をゆりて鞋のいふくゆりてゆりて
空也上人を中の若新を念をて一ると
を志もいふ空也と于鞋とをうけ念せ
むるゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて
又瘦の一字よおいてる例の双関の至
心又ゆりてゆりてゆりて又辨鼓のゆり

空也の身子手真盛とりよりの二代を嗣
て真盛法師と号し始て五女の三味
場をゆゆ申よ巡行し飄をるらし若
ゆりてゆりて又茶釜を製して市朝小
賣るるゆりてゆりてゆりてゆりて
夜神樂や鼻息白し面の肉
愚考神祇の志をこまてを白きと
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて
住吉社を神功皇后の氣歴代の天子
及將軍家より西建之不絶毎年七十
余夜の大妻阿の社飲二子百物十石とや
弱法師我門ゆり世候の札
一書よ江戸の所家ゆり所と食改より仕切
札とりよりのを書て家居候の持届振る

と云ふ強きものなりその礼あり家一を御世の
のふりとのをえはつりとあり

ふまてゆく年のまらげやいせ無也

愚考いせふものる年等の同志信國より
系清すりり多き建はのくりては
多無仁天皇十六年丁巳九月十月甲子渡
令郡宇治五十流川上よ遷しをり
元内宮と稱すりり村上天皇清寧
祭主公等の時ふ皇太祚ハ奠
少一内宮と号す外宮と云ふ
の少一あり祭の所豊受太祚雄略天皇二十
二年戊午秋七月七日丹波國余佐郡志
井系より今の山田の系よ遷しをり内宮
より四百八十回年後ありと云く又無也

五の十五

る日本紀曰祚武百皇五十八年紀國小
出現伊弉册等之本宮も崇祚百皇六
十五年建之新宮も景初百皇五十八
年建之無也文政を二子三百年年
あり法祚の年月異同ありて區くあり
也を撰ふるひきむけよけり

一書よ新改たよ一き雲并るるぬん
かとも寸約ひきむけて志よ詳る
愚考也を撰ふるとる東西よ引むけよ
とこ奠列一方向の時も北をよして
初そのるる東ハ東西よとるの東西
を撰と云南北を縦とりハ東西の短
南北よ四十米云く
よの死る家場て多げなく

愚考王維の詩よ云官橋采酒客山
本女郎祠別後同明月君應聽子規
詩中依者いほまはるも国秀の事
一入をうしくちをた女奥列を新古今
集よ歌宵と貞享の改の名妓ありて初
え結の六歌仙といふ事あり一人あり
不謂奥列唐士和必大橋小太夫吉登

松島一えの付子をもさうりや雀
の毛衣とよめりりきさハ

松島や 髻ふ身をこのまじやきす

秋亭曰 玄名おふ曰 祐盛法師 夜の子を
とりし歌もてしきもさうり 髻の毛衣
とりし歌を詠しりきさハ人しめり
るしりしわし小美見といふ人けり

つり但一寸法もたといひてりさふ
とよの舟もあがりてけりいひのきりきさ
とよとあてや舟よきりといふと髻ふ身を
とりし松島を詠し海まといさうりさ
そ寸法もあめといふ一書小髻ふ
のりて揚列も髻ひきさといふ古りり
をとりといふいさうりさといふはる
身といふとまといさうりさといふ

愚考慈母のりさ家礼よ曰慈母謂庶
子無母而又命他妾之無子者慈已也
同親母義服齊衰三年又名數小曰
嫡母繼母慈母養母庶母乳母合曰六
母又能与他樂心名曰慈家礼よ曰是

ふ出母嫁母を合せて以上八母と云
多ふのうれぬ花を牡丹の姿のま
公石曰まうまの花をトよりひくき林を
の花を上よりひくき陽氣のちき
を居る子を又格別より牡丹の大海ト
より咲のやとりまうまのまうま
をいひ

智恵のあら人もまをくは
愚考名義集ふ曰決定審得之智造
心分別謂之慧也そのまをいひ
ま
井のま急ふ浅く清く 枯
一書ふ曰浅く清く 枯
と云 愚考 漢書抄曰 梁縣有山

山上有水清浅其中生紫叶林和清
味新横斜水清沙又楚辞曰石漱兮
浅く飛龍兮翻此依例をいひて
一やんり浅く清く

竹の子の力を得ふと云ふ
成美曰豊國の神を方廣古の境内にお
大園秀吉ををあり 覆醬集ふ大山歌
豊國神廟壁云零落東山古廟郭
蒼苔蔓草上頽墻英芙蓉散 無
巫祝秋月春風依主張

竹の子や畠隣小悪太郎
愚考 悪を隣をた悪く足るの二月に
をた神月とりぬ 應仁公前ハ未
任なるものをとを隣次郎三郎と

後し小呼つきしなりと云ふなり

晴畫やと云ふ事いふを云の月

元記曰晴をえらむとて晴畫とらふの
を海屋よおろし一巻晴の性るよく
ものうしてその畫中入て畫を引より
さくらして晴畫のありと云ふや

愚考拾遺集よ云の夜を浦島の子
の衆る事也やとの影くぬけてくや
らむ又監命婦よりそ影くぬけり
そ云の夜のえとてぬきそはのさなり
なり

君り代や飛广系も晴いとの

太節曰通は至坂田歌飛广の社よ日月
影よ神事あり昔年を此系の日女

そ云く男の数不と晴を改ふいでき
被てわりの多りとするの拾遺集れ歌不
通にさる飛广の衆りとしてをのんは是
る事人の晴の数と云

糺ゆ今てふふと云ふ額發

高子紙小曰糺髮撰の時去来り許一
云わらまを糺髮の衆り一集よま

愚考源氏帚本の巻よ君の心は
と云ふ事ありものんをさる水身と云ふ
りつよみはのる額髪をさるさるつて
一とく心不そまはみぬ又総角
の巻よ一後多るまは款よ款髪
を引けはるつるをら款つる

あるく煙屏より入るを我もこの女やまを
らの歌のあそぶる山田の庵ふ田をさる
子等あとの住宅を歌あつて山中ふ令
所のり城の岸をさつて新居のたかさ
めとちの心お守ゆりの歌あり又このひや
といひまを彼庵の下ふ火をさるゆり
煙をさるゆり〜めて或る丘坂を拂ハ
しめ若る猿旋麻を去ら〜あつたり
忘りのを歌火麻火よりおれそを彼を白
西義といくと煙をさるゆり〜決つり〜
今の同書りもを吾母田人吉ふ蚕を知ふ
蚕をさるひやと称〜まふふ墓をさる
て蚕をさる〜といひはあふ不定の言
る蚕養の蚕をさる蚕室とさる〜中〜

やう二十

是則後新穀後の書述てゆりりの
凡蚕養の法正月朔子日ふ午年書述
〜り女子をさるひやと称〜て蚕室をさ
きとらひ移ひ神りなり次ふ二月年の日
神て蚕のさねをさる〜て暖日ふあ〜め
て三月年の日〜た〜めて桑ふ法をさ
四月月をさるひやを引時とすとさる〜めは長民
考字とさるひやの蚕室の内ふ何をさる〜
き墓をさる〜入〜めむや餅ふ蚕室を施
さる〜〜〜況や蚕養の室中〜全濃濃
焼〜〜文ふ池治河津を流〜〜〜
ふ〜〜〜〜任と〜〜〜や凡撫墓を
本自意ふ水意ふ〜任すりものあり
然ハ吾の惠帝墓をさる〜〜花林苑と

此境に在りては、
もあつての事なり

る所より角よりわけよす方ぬん
赤字子ふらひわつるの云書は、
卷のうちをほみつるものなり
旬會曰連續之見也と云く
一書小莊子
よ曰有所謂蝸者君知之乎有國於蝸
之左角者曰觸氏有國於蝸之右角者
曰蠻氏時相与爭地而殺伏尸數萬
逐北旬有五而後反

五月る小家より控してあるなり
師尹曰説文よ曰附螺脊負殼者曰蝸
牛無殼曰蛞蝓本草よる陵螺と書
則爾雅よるは、
訓す

一る士の謂次あり五月あり
弁地曰志一るふるをまのち
一る此一字よるは、
らハ能階を何しものなり

愚考、
五月のぬりるると二切よみ
るなり夫木集よ五月るる
よみよみらしては、
るるの急味よる似なり
は、
は、
は、

その次吉子の冠を冠し一節のそと後
の因幡よもりのし類もあつたりこころふ古代
のよもふ心なごのよもらきし一節の心のなとれ
よもひやうし

海舟やあまのりよきたゆりの花
愚考百念を空をとりあつこころよもるまはり
さきよもの花よもりこころす

子やあまのりよきの子の母の故の嘆む
成美曰百もよも山上臆良おらら等も今
をやあまのりよもりよもりよもりの母の我を
はらむの我よもりよもりこ

子よもりよきを言次う冠をよもりよもり

愚考二條院の次金賣吉次未春とりよ
りのあり奥列より京郊一毎年よもり

るりよもりよきを言次う冠をよもり

下園や地出なりよりの蟬のよもり

愚考海衛曰地蠶化肢踏折脊出而為
蟬よもりのよもりよもりよもりのよもりよもりよもり
出すとりよもりよもり

舟引の番の唱歌り合歌の花

一書よもりよもりよもりよもりよもりよもりよもり
よもりよもりよもりよもりよもりよもりよもり

目のよもりよもりよもりよもりよもりよもり

漁村よもり山城國宇治郡京と大津のり一里塚
の西の筋るり

よもりよもりよもりよもりよもりよもり

愚考竹を六十年よもりよもりよもりよもりよもり

そ竹則枯りとし有り世のそを遠くあは
て言さ三日月人を恨りて最生する舟有り
誰んをまじりぬく石原畑畔有くふあり小竹
有り決して大牛の十年枯りまてをまじり

夕々山和岬蕪のしりふの寄

愚考岬を売山之雲の暮の言く低く
立るいさるを元山の形ふ見えりしり

終夜林ゆきしや裏れや

一書ふか智の全昌寺を大層寺の城弁に
有祥有り有り善良を前夜蕪ふ別ま
ては寺ふ宿しての吟く翌日蕪ふ出の
寺ふ止宿有りしり

又月や六月の夜ふ六似ん

愚考埃囊抄曰詩又季を恨りて夜庭ふ

晒すゆふ月とりよ古今俳諧歌六日の
夜の歌よていしりうとあり心をもま
ふありあてありの川系をまやわしり
祖翁をををををの吟有り近路のる
日のまよりありしり川のををを
まじりしり境をををををををを
る

合歌の本の景然もいし星の歌

一書ふ曰窮後拾遺集ふ云七々の意も
うらみありしり一夜のうらみありしり
らむ合歌をありしりしりしりしり
ありて眠ふありしりしりしりしり
の本もありしりしりしりしりしり
まじりしりしりしりしりしりしり

を住職とて本山上人を隠居する
二世上人他阿まより代々他阿上人と
号す一世上人気比の明神より泥濘を
あふのきりて社民小砂をなまめひるより
代々の例とす系譜の案を門の弁を
本履をとるきり一持行の持多のし砂
石をあふりる事とす気比又八笥飯
仲衰を皇行宮の造りて則帝の
美をとあふり苗國の一宮なり舊事記より曰
二月幸角鹿則興行宮而右之是謂
笥飯宮

このころ夜の月をえよりの世道送

一書より但徒曰我子を甥のより信正と
しあふり人の公卿の子をよあふりると云

を養ふ叶ふやうなる道とあふり
愚考礼檀弓の足牙の子を我子とあふりや

あやまりてきこうあやゆり鱸

成美曰和漢三才系云曰鱸^カ絲^シ魚^イ形^カ色^シ似
粘^カ而^シ口^シ固^シ其^カ尾^シ有^カ小^シ岐^シ有^カ声^シ如^カ蛙^シ鳴^カ人
捕^カ之^カ哀^シ声^シ如^カ曰^シ五^シ紀^シ又^カ似^カ曰^シ岐^シ崔^シ氏
食^カ經^シ鱸^シ音^シ客^シ和^シ名^シ曰^シ知^シ加^シ布^シ里^シ以^シ輕^シ
而^シ有^カ黑^シ点^シ也 公石曰きこうあやゆり俗より蜂臭
とりよ鬻サソリ我信濃よりてきこうあやゆり
りよ此魚鱸より似て針ありさう口至て痛
はより鱸をとるとしてあやゆりてり
きこうあやゆりをきこうあやゆりてり
りあるさきさきり一つの附きあり享保
中積ヶ股洪水の後更みきこうあやゆり

その後徳の世りるおんまをくしとるる又
寛政の末よりきこころありそしめといふ
僧正の妹の小室れきあつた
一書ふ云彼花山僧正のうけつてそめ
のときよ并てたつりあひあむ小室のきこめと
まつこえまはり

一戸や夜ややうき 弱 途

愚考一戸を南朝飲して盛恩よりの十五里
かと下りり牧を花牧尾 設 荒野 等
そゆり中野ゆ後ふみちのくの弱途二十言
とり九二百里の行程るまは夜ややうき
とるり

田舎間の薄縁きうき 葉の宿

愚考田舎間を五尺八寸あるの厚き一寸

六分京間を六尺三寸厚き一寸七分三公
門端方六尺六寸厚き一寸八分毫を高く
野間とゆり吉野とて用ふとる人
禁中七尺厚き二寸各横を堅之の半なり

七尺のわらうのちの楯のあき

成美曰古今集きのよまわく早苗とるい
いほのよみ楯をよきて林風のうき

神田系

花すき大名流をとるはりい

愚考は改是の秋のるすの拾遺集ふおはり
よそやーるもあつた人の子と古をよみて
あつたあつたいんあつたいんあつたあつた
ひるあつたあつたあつたあつたあつた

成美曰神田系神系神大己貴命おはり

人皇四十五代 聖武天皇 天平二年庚
午鎮座 延文年間 有故合系平将門
美云 愚考北系五代記曰能系といふ
るは神田の神と限りとるは本院宣と云
我朝の能の始るるは地祇五代天照神
の天の岩戸より入るは一時八百萬神集り
て胡倉より一神楽歌を奏し多し
以来之をよよして能式之儀といひしは
足利大進多々天照太神十歳曆を春日の
神三歳申雅久多々住吉の神より
あり是皆神代の事あり又從宣小
我氏子といひたり系祈禱をるは
能の舞樂より志らんと有りより毎年九月
十五日神より能ありと云く御りより上牧家と

四つ三十二

小系家の合戦よりして大永四年神より能
おろしよりより能を倒して隔年の系祀
ありて今よりそのめ一系八幡より暮松し
りし舞楽能の考あり此人に戸より
よりして居住し三年一度の神事能
を治りてあり今より能を治りて能
を治りてあり今より能を治りて能
固を仕りて行列を花甚といひるあり
立出り林の文や能なり
成美曰病源偏曰風瘰癧一名癆瘰人皮
膚虚為風寒所折則起也和名加佐保
路之

塩魚の歯よりさきよりや林の書
一書よりさきよりさきよりさきより

梅咲て人の怒の悔のあり
芝山曰梅苑悟入師之柔和忍辱心よりあり
てりしる怒の悔をたれりし

梅の多や山路獲入る犬の多似

一書よ高岳よ入人犬のめしとりつふ
詞を返て嵩岳を梅の名西と 愚考

蘇子瞻の詩よ上畧山人醉後鉄冠落

溪女笑時銀擗低我來觀政同風俗

皆云吠犬足生驚但恐此翁一旦捨此

去長使山人索莫溪女啼此溪女を

上獨よ比喩しして梅の多よ胎をえ

し佐るるししは違ふも奪胎

換骨の句法るるり必定せり
梅の多や分入る里ハ牛の角

成美曰碧巖之隔墙見角使知其牛

社壁や角なる事し方よし梅のたれ

一書よ八重梅のたれを考ら梅のあり

あり梅の本意とすり変るは梅苑よ先

らして瘦てさうつくいよと梅の花より

きよきし妙よしをりしあり死よ新梅

くらのきしおもしろく心新梅の梅の

花のころつてしは意しそ附るよし

此子良子の一しゆりしめの花

一書よ信よたらしことりし太社宮の社

燦よ奉仕すり小女あり伊勢社宮の内よ

子良物忌と称す社家二十八家ありて

その娘をとりて社宮をとりて梅あり

一書ふ梅の本 希多のまはゆりしと書る
ふゆの梅を 清浄潔白なるの花をれを
梅をめでしか 婦貞女ふ比すりて 詩歌
るともよよく ありてあり
成美曰坂士仙
太神意系指の記 一云子良として 知雅
のをとめのいすこ 夫婦のわらうも 志らぬ
可也膳をを梅ふふ 急用入て 石住り 神
神意よふるありぬまは 二十三 十まて 日
事るる 冥監よをふきぬまは 十一 二
もせらるる ことまは 則 職を 辞す
入相の梅ふるありぬ 一ひき
成美曰暗香浮動月 黄昏とる梅の
有歌ありて 林和靖の句あり ことまは
あそく 夕のまは 梅ふむすぬ 一あり

梅り三十四

梅の細目や 雲の梅
才雅曰ひとりぬり 子のまらるるのう 梅り
あそく 梅根の梅の 自にあり ことまは 歌ふ
よりのや

百八のうねて 雲のや 雲のうね
吟歌曰百八の 障の数 法行 無常 是生
滅法 生滅 滅已 寂滅 為樂 法は 白の文
を 暮夜 冥夜 ふかて 一 夜ふ 二十 七 究
撞と りふ 則 百八 煩惱 を 滅 せむ ぬめ の
数 あり 愚 危 思ふ 百八 の 子 一 こと
冠り 云 雲 なる その の いひ け の 事 法 云 こと
赤 漆 の 湯 の 家 集 入 障 障 の 侍 を えて
よめ の 後 の 昔 を こと ね て なる 事 こと あり
う こと なる かな の こと 入 こと あり こと あり

独寐も下の字に客とらむはつ子白

愚考民家宜忌録よ曰正月を独寐と
いむ月有りひとりの寐違ハ必不祥を招く
もの有りといふ止るをたおせ違ハ伏菴と
床よ違てありするりさ違ハそのう
神子日とある違ハ下の字に客とらむと思つる
るう心又五雜俎よ曰止月上ノ子甲子
る違ハ癸年丙子る違ハ早戌子る違ハ
蝗虫庚子る違ハ叛壬子る違ハ水と云こ
時をくき一來ぬ夜とる違ハ睡と
愚考空也の遺書辨鼓を考申五示の
三昧場を夜行す來ぬ夜をまき氣ふ
る違ハおふる有り
うらやまーたのい切付猫の意

さつり三十五

去来抄曰翁の曰心よ俗情ありものい
ついにいふ出れといふ有り一違ハ俗
乞ふ即りて本情をあらはせり是より先ふ
然人々名は方よ言く人のいさげやす白
多し是の違とも寔ふいりてさしめ
本情をあらはせり愚評猿蓑ハ
祖翁の精撰ありて是の七部の内
一うらやま花実全うして序ふさ一自
筆よ書まひて吟味をそしめあり
集るるふうら悪評の白を入り
一きい謂る去来抄の梅いり
る一踏ふけ白本紙を定家卿の
うらやまー世をま志のうら猫の
妻よいささう入春の夕ら建祖翁紙人

を歌ふるありて則 定家卿をあたふるあり
ふありと陳するありいや定家卿のるあり
白法ありて始と終と態を交へて
るありとて意味ありとつて記するあり
えん心人去来抄の著言ふありあり
るありとて猶曰もあてしるありとつて
る情の本体をよくと見ぬいてつら
用捨するあり後令い他のるありを
用心しておめよ程するありとつて
ふとつてあり

いとけい入のいとあそつて虚本を
愚考虚本を枯木とつてありとつて
芽の出るあり前ありとつてあり

のけい入や柴胡の糸のうす曇

一書よ云一本よ柴胡の糸と書しつら
非るあり柴胡を糸のうすつらあり
糸拵入煎引の糸をけり独活
愚考本草曰得風不揺无風自動故
一名曰独揺叶糸ゆふの糸目を使
るを建はうこく一とつていげん必伸ま
はく一一名ヨキタラと云独活花を
白く美るあり花よ大毒ありんね
葉の毒あり一夜毒あり葱のき
古連曰ぎがを葱の花あり人丸の
をるあり一子一夜毒ありの裁入
萱子小端洗ひし後や
愚考萱を皆亡祿ふの子よ子葉あり

莖を何やらよ曰或人一人の子を失ひて
夜ゆきまはるの雨よまの草けりとしり
の弁よ弁念守尙悔より何を建てる塚の
す弁建守翁の此翁蒙追悼の句も墓
よむすいふ此句を支考評して
為るとすむの後對といふを思説と
祖翁を依倚よ又盲よ翁守の罪又泥
うは堀川百首よ昔より一蝶う垣根
よ何建よその法をよまよの莖の弁
して右尚悔の句よ三空の字あり
る古池集水鏡の梅注よ出守

木氏勘猿して見度世を筆ぬ
愚考冬の日よ木氏の解ありアサニ

一名ホ子ワキ草とりよ旅すのさうと
此翁翁骨を健よすまはるの

考の笠落しつら 栞の那

愚考考の笠よよ弁あるを考は梅花を
見しを翁えしめて栞のあし
を見えししありしあり梅花を例
の寸法よりいよ建ハ栞をりてうの寸
よきせあり

一枝ハをらぬわらう山

愚考我の定を花ぬす人とあえん
多一枝を折て物むおさうしを
を花よ笑しあふり又をらぬを
人とおれんを心とあり
考新よはるまてそハ花の考

成美曰江談抄曰玄實傳於却をと辞
すり時きつ國を山水きよし一とておん
き君の初をすりひおん事止り
氣とす其の夜何事そ花朝

愚考朝を和名抄よ由改神代卷曰
天照大神眷よ千箭の朝五百箭の
朝を履と云く武用兵略よ曰空徳を
矢を盛物なり空とりしもの種を付
りり埃囊抄よ曰捕正成ハ製すり字よ
宗と書片うのをさるなり又うの不
の文字廿四通書方なり云あり略す
大考や吉野の美の花の果
愚考花も美ありとやは獨書の心を
えりしを人麓くりりよとさるめて花も

美ありみより野の山白さるゆらり
乃灌や花もを代を流るる
一書よ曰乃灌も太田持資入道源頼政
之裔文武の才士なり文保十八年源兼光
て討死す年四十二やよる名あり建久
愚考乃灌も刺髪の号なり和歌ハ集
亦三十六歌仙の一人よて世人名りよ
標于よ夜らり花の立すり
愚考宋書曰宋の武帝の女壽陽公主
人日含章簷下よ所梅花公主の額の
上よ落つ五出の花を成す是を挿
りて去らり自後して梅花粧あり
源氏の娘をえりて立姿と信らるる
姿の摸字あり一

きいたぬらに多りある一し引りと爲してまは
とて上へつり引りと爲してまはつとて返
らぬとりよるるをいふは人の如き一云
流しよて此の白を別て面白くおま
たつと建と云く 一書の上よをとおま
ぬを引るといふは人の如き一人と引ると
みづのそのを除くは白あり 愚考をとお
さして多りと爲りて去ししきおれ
のつらあるり 能く得る十七文字又ま十
四文字あるとよてまらりと爲してそハ残し
て字の多きまの法あり行まを
丹波の人あ授の人とまをいふはまらり
つら東方よ縁あり道心の人とをいふ
をやと云ふは感歎の意を合むるは

行歌の多りて先にあまの豆齋を
考ふよとらまはるる。そと驚くは多き
てふををまらりてまはつとて世詩歌
の方よの能く得るは文盲ありとら
ちゆひをまらりて社をまはる三十一文字と
十七文字と押あつての能く得る全く
ゆりまはる余情と云ふの意味とを
まらむらゆらりのまらとまらつて
まらととまらとまらつて引くと
まらといふらつてらむと削るの歌いち
まらまらよいとまららむらむら
まらつてまらつてまららむらむら
まらつてまらつてまららむらむら
まらつてまらつてまららむらむら

のつし業に入りきりせしもの

吸物の先出茶をきりし其の味

一書よ肥後至水善寺よりの水泉池清水
苔出ふるなり

はるまきも盧同の男若かりのよて

一書よ小唐の詩人より茶紙を書き
人より盧仝の名をうりものよて茶人の
の隠考と見えし

梅をうりて車ひきふむ

古注よ曰夕敵の家の侍なり 成美曰

源氏夕敵の巻よのきこをよてや
侍りていとよびむさるのやめ
あやめえりわくしき人む侍るぬわ
つらるまじとらうこのきし大路よふら

おろしきりてとらうしきりのやめき入
ておろしきり

此の戸や蕎麦ぬすりよてぬをよむ

風谷曰古今著聞集よ云 淀十悪借取坊
のころありありの家ぬ 富よはをうて
侍りて或夜盗人の咎引てえしりたり
とゆつてよめりぬぬす人を長袴を
着しりらむをえんととりてそそりし
つらりらりの大盗人よ袴 出保補と
り入りのありきりゆつよを袴とら
るなり

まららの雲のまの 高きそ

一書よ入臨 輔のきりを雲と見えし夫
を茶と見えしと虚よ伝しりるなりと云

愚者もさういふは、
るり、良山の雲の海を、
して、
を、
定めて、
を心の、
一書、
を心の、
魚の、
待人、
立り、
湯、
古注、

るり、又古注、
借、
る、
み、
の、
白、
入、
よ、
の、
愚、
門、
の、
つ、
さ、

あゝめづるの建ハ登のあはれうのあね
ていそま建ハ登のいとい并一きいいてき
まの源款なりよつらうの雲をみり
人おれらめつすあきの袖うまの
きめのあらしらうと并す
まてと云い并一き登を志を
とりよの侍るまをさうことし引きて小
門の侍ありのあらしらうと並
はと并す一あまのあらしらうと並
くりあらしらうと並す女子とあらしら
来摘着をいとあはれしき作すうあ
よてあらしらうは美女子あり一きとら
あけまのあらしらうと並すあらしら
侍るり一後小あらしらうのあらしら湯後

せうの四十七

るあらしらの新あらしらと見ゆまとい小あらしら
登より登斗をまてあらしらの新あらしら
あらしらあらしらと見ゆまとい小あらしら
らあらしら三あらしらあらしらと見ゆまとい小あらしら
あらしらあらしらあらしらと見ゆまとい小あらしら
て小あらしらあらしらと見ゆまとい小あらしら
ハあらしらあらしらと見ゆまとい小あらしら

字あらしらあらしらと見ゆまとい小あらしら
命うれ一き一撫集のあらしら

古往よ日初あらしらあらしらあらしらあらしら
いといあらしらあらしらあらしらあらしら
との境界あらしらあらしらあらしらあらしら
西行とあらしらあらしらあらしらあらしら
あらしらあらしらあらしらあらしらあらしら

古往小曰西行能因り時人の侍と
ゆえい 一書よは子爲の主を徒よ信
茶をばるまはぬの月をすすり一花をむ
とむまはく人の来りたをいとい中略能因
西行の徒ありむの能る侍西行よ心
引りり彼法野一年あつるの言ふい
そりりりありりかよて撰集有と
思ふ子細か何事ハ命かう建りし
ものありと旅撰いして途中ありて
おらけしその疑も台中よ筆のてき
こえ侍りの推考の階ありえ 愚考
成ふと穰舎の侍をありよ比無小
あそ見えゆまきて西行能因りとハ
ぬり去来り自分のありを時の人

の侍と書えいといふ鴨之次之次
侍て吾妻より阿茶の思ひ立あり
おさるるなりといくまありし書
う一よありてさる侍ありくや西行上人
言費山よおんさし時後成郷千載集を
えらひありと守て年あるよ丹筆あり
歌とも書阿茶めておらりて花さるぬ
よの紫あり建と舟の法ありりやあり
と君ひらるるむ後成郷法歌のあり建
るるを感してあり あり歌ありおんく
入りひてそのありし書をすすり入り
るのありの紫のあり建ありりりり
見えりりり時後成郷文治三年あり
阿よ撰集の二字を撰集抄よ意して

一 不ゆりのも 汝ら建ハ是未れ 侍小近
くむさ建ハ能因のさくいをいよし 松不つ
この形

るゆり愈てさうまじく 十れさうまじ
ふ代授つさこのをさかんし 子目して

一 書小十の益を平生の酒麴よをゆら
けとえて子目の松を六階くり 成美曰
西新家集子代授さきものなまうらうら
はめてや 君りよまうらひの教ふとりの愈さ
愚考文徳実録曰 天安三年 正月禁中
有曲高預之者 不遇公卿 近侍数 十人
昔者よえ申必 有此事 時謂之 子目然
也 松といふゆして 二百よめいさくゆりあり
定きん 一きんあり の 文

金瑋と人よ呼ぶ 身の安さ

一 書小月達の町人の並入りくむるき派利
りして 結搦ゆりの腰の物をきくらめりす
その侍見りりぬ 一 世るありぬ 名を金瑋
しと名をさきらぬ 一 書小法慶の
侍必のまよりの 只今宝蔵をよとく使交し
りせりりりこはまよ入の侍りして 金瑋と名
名を法り 一 あり

物をまよりのまよ法ゆたくりあり
花とちり身を西まうまらまき

本曾の疏茎よはりのまら建は
一 書小西念を法然上人の弟子に 罪有て
刑ちらり 一 書小例の親忠の侍と 世中ハ
何をえても 只法ゆたくりあり 何まら

露のやうなるものなりきりの上より心
よみえして西急と附くものなり次のは木竹の
秋葉を皆えりて修るなり 愚考ははゆえ
うりよりいふに世を教へていひてちりぬの
報あるなり西急上人を多修院上北面文
武の達人俗名 法とりへ世路ををる事
を中たと惜り保延三年八月家出して北山
西急のゆりて判髪僧年二十二と云
西急寺を行基の因基今を専念の僧と
まををるなり西急寺小在し河とぬこり梅
をりるなり秀常ふうときまをるなり
より建前白法ゆはりりとはりて八月よ
八月小白雲の首のたるとりなり是二十
三西急のありとも云てとる西急の衣体

をりよむるの英と建ハ西急のありる眼か
有り木竹の秋葉よまをるなりまをるなり
西急の寂ををるなり貝系木竹路の記よ
曰大井大久多のる西急の墓あり西急
坂といふ秋葉を一白のえををりて来
考をいふむくぬめめ 撫 振るなり西急を
法然上人の弟子よりして物を附白の
るなりとるなり西急の名を世よみい
りかともありものなりとるなり
注者の心いふ是来るなり西急の名書
藉ふありて建前よりなり七八人ありぬ
秋葉のるなり 成美曰下学集飲食門
菜蔬スイクキ 秋葉ををるなり菜小湯秋をく
をへて二十日平とぬり寸納豆のあり

白子引てぬらりの出りを飯の上よ置て
喰ふ木苜蓿島の枝く山嶽山の邊よりて
すける有りの方倍又二年と唱ふ才いなき
を女帝花もの後砂石集もも出たり
何れい子 根の 乳く
夕月夜曼の萱根の比麻ちり
人も志事し一糸もく入の 水
愚考思ひ字を八雲山抄よ露字を
ゆき歌匠杖集よを唐古よて二人の
女を埋し暮よりせしむる字をゆき又
噴霧水の泉の志事字ともみし
をみするし一又思ひまうをみり
糸橋殿一といふ吟よみり
喜る三月 何げなく 矣

古往小菫を根ふちり又根ふちり
ゆりゆり根をとりて花とすむる ち猿の表
ふ一向ゆりしあり秘りの掌あをけぬ
ありと云く 一書小昔句の花をえんし
名人の業ありりそまを今時只志事り
のあて花をとりしせよの又尋るるの 曙て花
ふ根のと鈴くいりをいりてありあり
きりしりりりりりり先呼秘菫のりり
愚考思ひ獨云小日菫を根花といふ
てさく正菫小るるおえりて矣木ハハ
ふ及ちん根らえ根をさして花とすむる
ありゆりゆり根入しりりりりりりりり
遊草を根をとりて花とすむる不ひの
やうふんゆりてありりりりりりりりり

一書ふ此の事所謂三岐切なり梅小
葉の色をまじりて東海を吹送一口小
食の事一りの感堪少なり云々
志と云く稲のて下と云ふなり
成美曰三才易云曰今云糶團子之類
古者祭多用黍稷今則以糲糲又和名
抄糲之度政祭備之又宇治拾遺云云
志と云くをせと云く一と云くをせと云くハ
愚考神名目於聚抄曰糲米を蒸し
て鵜卵のぬくおよせして斤木ふ盛て神祭
ふ候云々
稻の葉延のちりりるの事云々
愚考新のなと萩の白とる五白の
白葉の云々してままなるなり

露心のほりぬみ越り 於鹿山
内義 政々として呼草 云々云々
古往皆曰西形の傳と寸去来文云曰
此の事小西形をわりのいよせつるなり
て小又西形於兼山を越り時於兼山
うき世をよそよふなり控していふなる
ゆく事なるなり云々 愚考此文体更
よ心ゆりいゝ露の白をきして我々の
めく事なりいゝなり命をまじりてきの白の
務程とあちちとちちにして見えん文
体なり又世上の説よる内義政とる
虚名なり只し傳をの傳と云て是
のよく人を定るる悪しと云くいふるれ
ハ云く抄書の傳なるなりを記すなり

るくん内蔵政よりきくくく内蔵政
美濃守とてきくくいりふきくく付
らゆきく族の御徳ありきくく長
の海に元日二首苗代の水ありけり
てりえゆりきくく杉きくく雲の林の杉
うけり龍馬山とて古里おりの杉
美濃のすきくく部をきくく入
指の葉のひの白ふすりりてきく心の付
ありきくく心集あり又ゆきく
とて別きくく付ありきくく必
後又し後倉のひきくく下向その時
不破の園ふきくくをきくく記とい
二夜りきくくのひきくくきく
きく心のきくく織りとてきく入

次の佐吉もゆきく身のうきく付り時
てゆきくをきくくをきくく
よ附きくく建政の昔あり類聚国史
曰任加茂奈主元永指内蔵政云を神
武天皇以来奈主をきくく非を
奈らきくくめきくくをきくく
ゆきくゆきく内蔵政ふ任すと
あゆきく加茂の縁をきくく内蔵政と
うきくく又ゆきくをきくくゆきく
うきくゆきくゆきくゆきくゆきく
してきくくゆきくゆきくゆきく
ゆきくゆきくゆきくゆきくゆきく
ゆきくゆきくゆきくゆきくゆきく
ゆきくゆきくゆきくゆきくゆきく

象を附するは其の筆に按次の百八本
の云々の松もて前二の巻を落とめしり
兼の札巻の札より并りて
去る又よ曰是を撰集抄の故りて
中よと云々 愚案撰集抄よ曰西行法師
伝説必休みのわたりを以て細ありし
よる字すこしこきはらんとゆう
おやえしきとくりまひしよるり
を并るししるを以て落としてす
落しり傍あり落の内よそのを
紙よてれを并りそのそのの札よ
あり落しけり松の巻はのいり
よるしむしきのさかきとく
萩女希花曰そ略守萩の花うつら

の松をふりて松もてしはは
ちりはく西行問て云いはく
あよあやこりよ初をうて
よりとほつりよを落し
とん又一町はりり集り
のうらとくしを落し
あよあやこりよ初をうて
よるしむしきのさかきとく
萩女希花曰そ略守萩の花うつら

えをさめてさる好く納めあふいと云々
ものうりたるりて善の目み善好吟
機をゆげのゆるを思へ合せつた
はくまふふりて無くふらむ
若くしより百舌の 一ひき
成美曰 史本集曰 すまのりりあそ
すうし小尊より山の志げ并お花のこよ
伊室あふぬ かの海はく
愚考り筑前玄海遊志と内海と云
又瀬戸内とゆへは是より九列塔一りけ
て内海とり入と云く内海の波の満
干空りありと和漢三才集云よるんゆ
内海を伊の波流る
わくまをこく 一ひき 終めり

大膽よおのいしはまぬ意をて
公石曰 伊勢物語曰 陸奥の女をこり
ひ一夜ちりてまに夜涼よまおあつし
女は 刺すあをまきしはふまあつし
りげのまのさつたあをまのりはる
小刀の拾ひあり 細工とんこ
成美曰 織人を刺合よの波やりりもあ
つてなるふ小刀のあふ一まきあつし
かりらむ
そくと流しあをさくめむな款
一浪曰 あくあむさくあて律義るるをり
愚考り小工面のなる一工地悔りらむ
らぬの等皆さくの字のりあ

幻住菴記芭蕉抄

一書小祖菴幻住菴の文多三通あり始
の一通を後柳舎小育守の一通を賦之流の
一通を猿蓑集よ出

石山の奥岩岡のうしうしふ山
あり國分山といふそのうみふか

古の名を傳ふある一

愚考江別栗太郎渡田より石山をう
るありは約一里計幻住庵をえ當時
を長持寺の境内より流守ふふち
え正天皇養老五年勅命ふよて流
ふよ建らるる基を造り丈六釈迦
の像を、並て云て

麓ふ細き流をわたりて

翠微ふ宅ふり三曲二百歩

りして八幡をえせり

一書小翠微を山の半腹あり 成美曰

杜牧詩与客携壺上翠微 甫雅曰山

未及頂上在旁坡陀之趣名翠微か

しこふ八幡の小社あり侍ふ推の本

あり昔のうやとゆり 一書ふ山の

形の美ありも翠微とり

形体も殊院の尊像とや

唯一の家も甚忌ちりるを

西都光を和らげ利益の

塵を曰しう志あり

愚考殊院を傳灯録曰性情尸迦父之

各月上母之各殊勝妙歌云々西部寺地
弥陀垂跡應神天皇也和共光同共
塵界一して和光同塵といふ

目次是人の指さるる事ハい
神さるりの志何りるる傍小住
すて〜子の産ありよのき根毎
新を〜の并願ねりり蟹
て狐狸婦〜とをゆるり幻住
房と云何〜の傍何り〜
勇士菱泥氏曲水子の伯父小
る心持り〜とを今も八年計
むり〜のりて西小幻住老人
の志をの并のこせり
一書小菱泥氏曲翠通称外記 一書小幻住

老人を膳所藩中本多八布左衛門六
十余歳より卒寸探山居士

予又市中をさるり十年計
みりて五十年やちりり身

成美曰けし祖孫曰十七才拙居二年

兼虫の并のを失ひ蝮牛の家
ををるる事

秋亭曰古歌二首みの出のみのや失々
百の夜を父よ母よと啼あり〜あつ家を
すてぬ心をみる〜蝮牛をよ〜くも
らぬ事と

美相象写の暑き目小面を
あり〜するこちゆみ
き少流の菟殿よき〜すを

そ流まぬもの草をここの中より下せ
て集く入る人とは云くせりたを史文集と
りて蘇の文とりの皆集りてその小はく
まのりて知りぬへ

とすいとなしるをそらふ無して
一書小支考文探西行の歌あり全文を先す
後信又選小宿りしるを燕る人と
愚考平為喜終の歌お後小劉の歌
小劉をくしと猪小中らや行子らの
宿りしるをりしてとらまはむとては

りしる小宿の字を冠しきしり計る
のや又曰本流きり守屋の吳の字と
るりて太子の流りあり寺を流き
あゆしよ寺流きとりのりて
魂吳楚東南よをり

一書小杜子美岳陽樓小登り待昔聞
洞庭水今上岳陽樓吳楚東南圻
乾坤日夜浮

身多瀟湘洞庭の庭のり

成美曰山谷詩小惠宗烟雨歸亭坐
我請湘洞庭欲喚篇并飯去故人
是丹青 愚考惠宗の草屋の名画
見とるを舟を呼ひては朋友の云は
画るりとりよ小登りしる詩るり湖氷東

南ふ流ききりふ心を能くしおのそん
身をよむまのしきも眺守方より引うけ
らまらしてまのりあし

ふら未申あをくらむらん家
より手かたふ備り南葉峰
よりのおろし

一書ふ家語ふ曰南風之薰兮可解吾
民之愠兮 愚考熏風復のゆるみんと
事文続集一のえげ又呂氏春秋曰東南
のゆるみ

山は海を浸して涼し日枝の
山比良の言根よりの唐傍の松
をうすあめを城あり橋有
殆どうすあめあり笠えよのよふ

木樵のしん息

一書ふ山中に事 樵唱有河守の傳と
愚考或りのふ曰木樵の傳を木樵の唄
をりふとまのまは此をうまりのりふを
あし樵夫の唄ありと知り

麓の小田ふ早苗とりの秋葉
能くふ文園のそふ水鏡の
まろく美京物とくして
ふらふといふ事あり中よふ
之上山を士峰の傳ふらふて
武苑ののたき、柘とたふ
出らま

愚考三上山とる富士十名の一ツふ
して巽松山といふ士峰も十名の

佐々竹のりあり

一書小山谷集徐老海棠果上王翁
主簿峰庵注少云徐佐樂道院於
樂律中一家有海棠數株結其上時
与客果飲其間又王在人多稱四方
歸結屋於主簿幕上嘗有毛人一至
其間向道愚考主簿嘗と書る
非有り主簿を官名有り同の意名
ありて江西の廬陵郡よりあり木客
多といひはる小五ふあり歌の下
白毛を帯りしを主簿といひはる
の危形小似しと述べて主簿峰と
りし有りまこととを鏡る小似しと述べて
山とりありぬ

唯睡癖山民と成て

一書小癖史曰李農老睡を好み
危人と云すり小食終て皆棋を下す
農老を輒抗小はきて眠る危の敷
局終る時一度展轉して云我始て
一局あり公等幾局をとりし
愚考冷齋夜話曰范堯夫小睡眠の詩
あり五雜俎曰睡を嗜む者あり邊老先
杜牧其介数人皆有此癖近時張東海
有睡癖記又陸叙翁睡癖の詩ありと
述べてはるをとりしありあり
展款よ是をたけ出
一書小展款より山のきき歌之 芝山曰
王子端待小門前刺啄定佳客簪外

扇影皆好山 一書小東坡按衣安辰
報

空山小風を叩て庵守

一書小石林詩話曰青山 扣風坐黃鳥

徒書 眠是山 閑寂のさるるなり

一書小玉荆公詩 扣風對青山 徒書

眠北園

をさるるし心あめるるの世を空

の遠きを汲て并にさるる

炊くともさるるの常を徒て

一炉の梅のいとさるる

一書小西行上人とさるるしと并にさるる

岩のりり苔清あり并にさるるしと并にさるる

すさるるなりなり 成美曰山家集家集未

まの六十五

よ見えたり或曰小堀宗甫の歌り
をさるる住々心人の跡小
心さるる住々心人の跡小
宗甫のすさるるなり一
るを備て夜のりのをさるる
るさるるところさるるといさるる
片さるるなりを筑紫宗高良山
の傍正る加茂の甲斐あり
養子までさるるい活子のあり
いさるるなりをさるる人さるる
て額をさるるいとさるるしと筆
をさるるしと住居の三字を送
らるる報て字居の記念とあり
一書小加茂の甲斐ありなり加茂詞皮

後本甲斐の敦虫と号す安寛
永の間の能書なり巖子未詳号
稱してりよや 愚考李太白待大后
是又康之巖父云く又巖君と云
巖のイワクニあり

まの山をとりての猿床と
云せり器多し一くもあり
本音の核益越の若山表斗
北の上の柱ふりけりるを
しとくふんふ心を動し
ありる空音の翁里のたのこ共
入集りてあつたの穂をい
し急の豆畑よのりふ
素中あつた農後日院ふ山

の増ふ

一書小雲谷雜詠朱晦庵野人載酒
未農終日已夕古文集より見ゆ
夜坐静小月を待ての歌
を伴ふ灯をえりて周西ふ
是非をさす

一書小夜坐不厭湖上月 一書小莊子
奇物海日周西向系曰曩子行今子止
曩子坐今子起莊子曰義曰周西
彰邊之終落者此時是非待彼之
喻也

このくいつをさへひさる小閑
寂をぬみ山野ふ跡をさ
くさむとよめるあつたや

病身人ふ倦て世をいと
し人ふ似たり傳き月
うはりのさし拙き身は科を
おりよよのつとけを命
の能をうらやみ

一書ふ翁を菴堂家同苗仁古島門後の家
辰杉尾甚七郎と云陪従の小舟を建六
官ををうらやみ多し
一云は佛齋祖室の庵よ入
らむとせしむるもくちまき
ゆ雲よ身ををきめ花をみ
を骨してせうくせ涯の人り
あくくさるるまははるる
才よりしてはひるるるるる

玄味堂曰惠能禪師吾三十而袈裟
辭祖室 一書よ曰佛頂禪師子冬
して採さかしくせぬりといま
をも余ふしはるるるるる
純徳の一をらふはるるるるる
はるるるるる

樂天を五膳の祿をやうり

老社を瘦しり

一書よえ稗寄 樂天詩よ 老達佳
京惟惆悵 西地 各傷無限祿
成美曰小夜の森覺よ云良甚云樂天
とりよし人をも軽たつみをはるる
るもあゆよ心をくさしてわくく
よりの心むのよみ忘らしと待よの

くまのつらり 一書小栗白駒 杜甫
飯顆山頭 逢 杜甫 頭戴笠子日卓
牛為同緣 何太瘦 生只為從前
待苦

賢愚文雙のちと一しうさる
まのしるまの幻の栖るしんや
とみりひの捨てしうしぬ
一書小海鏡 注曰 謂之尚忠 尚尚
雙因尚文

先このむ推の本も者な本立
一書小源氏推り本の巻ふいりるの本の
まのしるまの幻のちと一しうさる
てしうさるまの捨てしうしぬ
こみりひの捨てしうしぬ

てふとげの年をささるのあつら
みこるまのあつらとさるゆりゆり
るまのあつらとさるゆりゆり
いをもとげるとさるまのあつら
まのあつらとさるまのあつら
うげとさるまのあつらとさるまのあつら
とこふまのあつらとさるまのあつら
しき信とさるまのあつらとさるまのあつら
のむとさるまのあつらとさるまのあつら
政の推をひらるまのあつらとさるまのあつら
非るまのあつら

たのしむる紙帳ようげと送るま
芝山曰司る温公の布衣の終ると
よりのあつらとさるまのあつらとさるまのあつら

ありむらと無しり又小説小日鄭
 慶好書苦紙て急意ち枝の柔を
 彫へて是ふ書て樂しむ傍もさ似
 たり 愚考家隆卿云の紫をを考の
 みるふふ書はげつ教ふおら連うはの
 やるゆり連是ふはげてをり
 教や葎の中の花うつき
 愚考白氏文集葎室中有美人常
 織詣齋館市又字苑ふ日教ハ眉る
 のるるりカホバセト訓す
 多しし一考ふ下教ちく月書
 愚考源氏もるあつし一タトルるり
 句今言曰蹠躡るり字彙曰後安の形るり
 膳亦未や早苗のつけふ夕涼

愚考山王交礼の供御を忠守ゆ急小膳亦
 淡といしせしヨの切つそ事をせ、とよつしるものりや
 一あらのそや考相田のそと一麦
 愚考之るる大坂の人山城のそり相田の
 麦粉をそ去産とすりの白き土産を裁
 玉の産物をそ去す(一考)ハ古今集
 よはの玉のるふいおのそん山城のるの
 とちるふおのるむむをのそりそはの
 玉をそ出るるをそり山城のそ相
 田の麦粉をそ去す(一考)ハ古今集
 賞給てとちるふおのそ心いそ考の
 の産物産物よおをそせおのいやっ小感
 あり
 一入山まはりりや旅縁そり

愚考歌氏要覽曰滑家四月の月
 を以て結なとて安始九十日七月
 月を以て解なとすとのたこの旅
 床すきとも九十日れるる山小蓋りて
 おんすくむと書音ふやありへ
 文立や核の奥の一志あり
 愚考力サる良香あり 磬と書一
 志ありありとて清をあるを磬云
 明年誕生初日唐
 去るやありとも果は戸のいつ年
 愚考住持てとての宿をてあてて運
 ハ志ありありとての宿をてあてて運
 年終り宿は白を明年ののりる事
 戸の心は子ふめえりつけとてとて

四十七

何んまふり

猿養者芭蕉翁滑誓之首

諫也

愚考史記滑稽傳考物云滑稽酒器
 也言出口成章詞不窮竭若滑稽之
 吐酒也滑稽ハ滑を妙美あり誓誓を詞
 をさるあり 成美曰諫字彙与響
 同也字典云唐堯神人賜有諫在
 坐執事為害在亥中 愚考猿養
 の一句も六窓一猿の名吟滑稽ハ首韻
し書も非あり首首韻也
 非比彼山寺偷衣朝市頂

冠笑只任心感物写興

而已矣
一書小漢室袒戴鵲冠笑朝市金
圈狙偷衣感危徒亦の介猿の説
しおもひしして記寸小足ら

洛下逸人凡兆去来随

翁遊学棋鼓行窓躍等

凌節斯有歲屬撰此集

玩弄無己自謂絶起狐

腋白裘者也

愚考孟嘗君の持ふの狐腋の白裘
直千金ありて天下を致するの氣を
幸娘ふありて秦の囚を逃れし
ゆとの名裘あり王褒曰千金之裘

一狐之腋少ありて袒露の體兼ハ此
名裘の純類すりとするの或人窮して
云天下を致すの白裘小勝まありとハ
如何言て曰千疋の狐を殺して一人の
寒氣を乞ふのく名類ありて宝と一を
すりよ是らに兼るま小引之人間の
雨具をとりて獲ふを仁情何
日の福よありさるあり又毛裘ハ兼
毛を合せしるる子疋の狐の腋中の
毛を縫物をもくするを子筋の毛を
よりの物とせし一兼の形とありを文
感よ絶するの毛を縫ハ兼る偷衣頂冠
の笑いよ比するよありとあり
於是四方登友憧々往來

秋海ノ思ハ合せて歌号五卷の蘊奥なるを知らしむ

維也元禄四稔辛未仲夏余掛

錫於洛陽旅亭偶會兆未吟席

見需記此夏題昏尾卒援毫不

撈拙庶哉一蓑高張有補于詞

海漁人云

愚考維字彙曰凡策書の年月必維字を以發之

取之時の古字有り稔を穀一熟の義小

之と昏尾を書尾有り王元之曰大張一

網羅群英

